

高校作文教育の実際

一

十年余にわたる作文教育実践の集積である本書は、つぎのような構成になっている。

I 作文教育への出発

II 高校作文指導の実践―「読むこと」と

「書くこと」との関連を踏まえて（一・

二年時）―

III 高校三年生への論文指導―「読むこと」と

「書くこと」との関連による―

IV 書き合うことの実践

V 高校作文教育への構想

二

小学校から中学校、そして高等学校と、学校段階をのぼるにつれて低調になっていくのが作文教育の一般的な傾向であることを認めなくてはならない、というさびしい状況の中で、熱意にあふれる高校作文教育実践書に接して感銘を受けた。

著者は、作文教育の目的、目標について、

つぎのような見解をもっている。

「……私は、作文教育の基盤を、人間の心の深淵に立ち入った表現に置き、作文教育

の究極の目的を、深い内容のある独自の文章スタイルの体得と、それを書き深め、省

察し、生涯文章を書き続けていく持続力の習得とにおいた。」（一四―四）

「スタイル」を、書き手のものの見方、考

え方、感じ方の個性が、文章表現として定着

されたものととらえるなら、「スタイル」の

獲得、確立は、まぎれもなく、作文教育の究

極の目標たりうるであろう。

三

作文は、国語科諸領域のうちで、生徒、教師双方にとって負担の大きいものであることは否定できない。しかしまた、最も人間が赤裸々に立ちあらわれる領域であることも事実である。作文の学習指導の苦しさは、書くことによる自己確認、自己確立の体験によつて

初めて克服されるものようである。

著者が、一年生の作文教室において、書くことの意味（意義）を問い直させ、自覚させることをねらって、四〇〇字限定作文を課しているのは、書くという行為のもつ、こうした意義や機能を確認させるためであったと考えられる。

四

学習指導要領の改訂に際して、表現力（とりわけ文章表現力）の育成が、しばしば重点項目になっていることは周知のことである。

しかし、この問題の解決は、なかなか容易

なことではない。独立した作文単元によるま

とまった指導をすることも稀であることが多い。

本書II、III章の副題は、「読むこと」と

「書くこと」との関連」という共通の観点を

もっている。本書の関連指導は、決して、そ

のことによつて作文指導の時間を確保すると

いう便宜的なものではない。理解と表現の本

質的なかかわりを求めて実践されたものであ

る。しかも、結果として、表現指導のため

の豊かな時間の確保することにもなってい

る。

ところで、表現と理解の本質的な関係とは何か。わたしたちは、国語科の大部分を占める理解領域の学習が、個々の学習者の個性的表現によって支えられているということを、ややもすると軽く見てはいなかったであろうか。豊かに深く理解することは、豊かに深く表現するということである。また、豊かに深く表現するとは、対象を豊かに深く理解していることでもある。両者の相関関係が、本書においてみごとに実証されている。特に三年生を対象とする論文指導の実践は、その指導計画の入念であることと、できあがった生徒作品の質の点から、本書全五章のうちで最も説得力のある部分であると言つてよいであろう。ここに紹介され、分析された高校生の作品の質の高さと規模の大きさ（紹介されたものの一つは一五九枚にも及ぶ）は注目に値する。

こうした実践が、著者自身の表現生活に支えられて実現していること（著者自身の文章が、しばしば教材として用いられている）から学ぶことは多い。

五

対象とじっくり向かい合い、そのものの理

解を深めることが個性的なものの見方や感じ方を生む。即ち個性的なスタイルを生む。表現という活動のこのような機能は、実践・研究者である著者自身のうちにも生きていることを二一八ページに及ぶ本書は示している。（A五判二一八ページ、昭和五六年八月一〇日、深水社刊 二、八〇〇円）（森田信義）